

2015年5月31日 第五主日礼拝

説教「人生の誘惑」

マタイの福音書4章1-11節

【御霊に導かれて】

1節には不思議なことが書いてあります。「悪魔の試みを受けるため、御霊に導かれて」と。このできごと、主イエスを誘惑しているのは悪魔です。でも、そこには聖霊の導きがありました。神さまが、よしとされて起こったことでした。

この荒野の誘惑のできごとは、主イエスのバプテスマに続いて、すぐに起こっています。ここから主イエスの公の生涯、公のお働きが始まります。その最初のあったこの誘惑は、主イエスのお働きの方向を決めるものでした。

私たちは、人生の誘惑に合うときに、その本質を見きわめたいものです。それが私たちと神さまとの関係を損ねてしまうものであるなら、はっきりとノーと言うことです。

【父のみこころ】

主イエスが会われた誘惑、それは、見たところ無害のように思える誘惑でした。40日間の断食では、睡眠不足や立ちくらみの中で食べ物のことばかり妄想するようになると言います。人となった主イエスも、同じく弱り切って、働けなくなりました。

そんな中で、石をパンにしたらいい、という誘惑。主イエスは神。石をパンにすることはできません。そのパンで空腹を満たす。そして、公の働きにとりかかる。何も悪いことではないように思えます。

けれども、主イエスは自分の手で自分の空腹を満たすことを拒否しました。「ここで主イエスは生涯の生き方を選んだ。それは、十字架の死に続く生き方。十字架の生き方だ」、と言う人もいます。

十字架の生き方とは、父なる神さまのみこころを一番たいせつに生きる生き方。主イエスは、そのことをはっきりと確認なさいました。父がパンを与えるならば、パンをいただく。父が飢えを与えられるな

ら、飢えを受け入れる、こう宣言なさって、そこから主の恵みに満ちたお働きが始まりました。

【申命記】

主イエスがお語りになった4節は、申命記8章3節のみことばです。荒野の40年間に起こったことは、実は、主イエスの場合とは逆。イスラエルの人々は飢えていないのです。マナという不思議なパンで、神さまに養い続けていただきました。それは、パンだけではなく、神さまの口から出ることばによって生きることを知るため。神のことばは、愛のことば。それも、ただ、ことばだけ、というのではなく、神さまの愛そのものです。人は神さまの愛によって生きる。そのことを知る必要があるのです。

荒野はほんとうに何も無いところ。そこで、岩から水を出して与え、マナを降らせてくださった神さま。だから、荒野での一日一日は、食べるごとに、飲むごとに、神さまの愛を思う日々でした。そこでイスラエルが受けた訓練とは、神さまの愛に身をゆだねる訓練。今日のマナに満足し、明日もマナがいただけることを信頼する訓練でした。そのためにたいせつなのは、神さまのくださる祝福よりも、神さまに目を注ぐことだったのです。人生という旅の中で、ときには荒野を通らされる私たちです。そんなとき神さまは、ご自分の愛に信頼するようにお招きになっています。

私たちの経験もまた、神さまがこれまでくださった、さまざまな不思議を思い出させます。もう絶体絶命というような危機が何度もあったけれども、そのたびに、神さまはすばらしいみわざを見せてくださってきました。神さまの解決は、芸術的。まるで神さまは、楽しんでおられるかのように、ときがくると、軽々と不思議なことをなさいます。そして、いくつもの難問を同時に解決してくださいます。しかも、そうしながら、私たちを成長させてくださるのです。

神さまは、ほんとうにあわれみ深いお方です。私たちの必要を与えてくださる。私たちを荒野に連れ出す。神さま以外の助けが、ぜったいない場所に

連れ出して、ご自分の手から与えてくださる。それは、ご自分に目を注がせるため。パンを差し出してください。お方の手に目を注ぎ、さらに目をあげて、神さまご自身に目を注ぐためです。そして、「さあ、目を上げて、あなたを養っているのがだれか、見てご覧。わたしだよ。わたしがあなたがたを養っているのだ。これからもあなたを養おう、わたしが、そうしたいからだ。」そうおっしゃってくださいなのです。

神さまが与えてくださるのは、パンだけではありません。主イエスを与えてくださいました。私たちが神の子とするために、御子をおしむことをされませんでした。この神さまを私たちは、信頼して生きるのです。

【恵みに生きる】

私たちの前には、主イエスが選ばれた道が開かれています。神さまを信頼し、神さまの手から受け取る生き方。この生き方は、じつは豊かな生き方です。神さまの与えてくださるものを、感謝していただき、それを他の人々にも、分け与えて生きる生き方。

今日の個所にある他のふたつの誘惑の本質もまた、やはり神様の愛からそれることです。「あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい。」(6)は神さまを試みることです。自分のために神さまを利用し、神さまの愛を忘れて、神さまを自分の都合の良いように利用することです。「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」(9)は、神さまに背を向ける、あからさまに神さまの愛を拒絶することでした。

けれども主イエスは、父なる神さまの愛に信頼する道を選びました。私たちも同じように生きます。自分の手で満たそうとしないで、神さまに感謝して生きるのです。主イエスを導いた聖霊がそうさせてくださいます。ただ、私たちの側にもひとつの覚悟が必要です。覚悟といっても、それは悲壮な覚悟ではありません。神さまからどこまでも恵みをいただく、そういう覚悟です。